

1. さばいてはいけません。さばかれたいからです。
2. あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。

説教

これはイエスさまの山上の説教の一節です。

山上の説教は、5章から7章までのとても長い説教です。5章で、イエスさまは、まずどのような者が幸いかを教え、天国の幸いにあずかるには、人の義を越えた神の義を、神からいただかなければならないことを教えます。続く6章では、「施し、祈り、断食」というイスラエルの三大徳を挙げて、外面的な見せかけの正しさではなく、真に神を畏れる敬虔さを教えます。そして、最後の7章では、これまで教えてきたことの総まとめをします。すなわち、これまでイエスさまが教えてきたことを実行するか否かの精算を迫られる時が来ると言うのです。

いくつかのたとえ話を通して、イエスさまは、神の「さばき」について教えます。イエスさまは、ご自分が教えたことを、ただそのまま語りっぱなしになさるお方ではありません。それを守ることを迫ります。イエスさまのことばは、生けるまことの神のことばなのです。

その最初にイエスさまは教えます。「さばいてはいけません。さばかれたいからです。」「さばく」と訳される言葉には「区別する、判断する、決定する、裁判する、審判する、罰する」といった意味があります。ですから、ここでイエスさまが「さばいてはいけません」と言う時、「人の善悪を論じるな」とか、「他人に関して一切意見を言うな」と教えているように見えるのですが、そういう意味ではありません。人とぶつからず、当たり障りなく、適当に、仲良く、平穏無事に生活するよう勧めているのでもありません。あるいは、教会に於いて公に罪を犯した人を戒める「戒規」をすることを禁じているわけでもありません。

なぜなら、イエスさまは続く6節で次のように教えておられるからです。「聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから。」すなわち、神に敵対する「犬」や「豚」が誰であるかを正しく判断し区別するよう命じておられます。15節では、「羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼」である「にせ預言者たちに気をつけなさい」と命じておられます。さらには、16章を見ると、イエスさまは、「天の御国のかぎ」をペテロに約束し(16:19)、罪を犯している者にはその罪を「責め」、それでも悔い改めない場合には「教会に告げ」、「教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい」と厳しく命じておられるのです(18:15-18)。

このように、イエスさまが「さばいてはいけません」と教える時、それは、人の悪に目をつぶって寛容に仲良くしろとか、戒規の執行を禁じているわけではありません。そもそも教会とは、そこで神のことばが正しく教えられ、聖礼典と戒規が正しく執行される場所です。使徒パウロは、公に罪を犯して悔い改めない兄弟への陪餐を禁じます(1コリント5:11-13)。そして、福音を曲げる異端を「呪われよ」と繰り返し呪いました(ガラテヤ1:8-9)。旧約聖書を見ると、さばきつかさや王といった役職がイスラエルにはありました。彼らは神に任命されて、まさしく「さばき」をなす正式な役職です。国や人々について善悪を判断します。悪を取り締まり、弱い者の権利を保護することで、国家の秩序を守らなければなりません。これは、神ご自身が定めて任職した、国家の正式なつとめです。それなのに、「さばいてはいけません」というご命令によって、為政者が「さばき」をなすことをイエスさまが禁じているとは、到底解釈することができません。

以上のことから、「さばいてはいけません」とのイエスさまの教えは、事の善悪を論じることを禁じたり、教会や国家の「さばき」を禁じているわけではないことがわかります。むしろ、国家や教会に於ける「さばき」は必要であり、善悪をしっかりと判断し、異端を厳しく識別して排撃することは、神のみこころなのです。

それでは、「さばいてはいけません」とイエスさまが言われる時、それは何を意味しているのでしょうか。それは、最終的に人をさばく権威が、人にはなく、神にこそあり、神が究極のさばき主であるということです。モーセは、イスラエルの民をさばく役職である「さばきつかさたち」を立てた時、彼らに命じました。

「あなたがたの身内の者たちの間の事をよく聞きなさい。ある人と身内の者たちとの間、また在留異国人との間を正しくさばきなさい。さばきをするとき、人をかたよって見てはならない。身分の低い人にも高い人にもみな、同じように聞かなければならない。人を恐れてはならない。さばきは神のものである。」（申命記 1:16-17）モーセの言うように「さばきは神のもの」なのです。人は単に神のさばきをなすつとめを委ねられているに過ぎません。ですから、いい気になって、やりたい放題、自分の思いのままに人をさばいていたら、逆に自分がさばきを受けることになります。

イエスさまは言われました。「さばいてはいけません。さばかれないためです。」極めて簡潔な表現ですが、極めて恐ろしい事実です。人をさばくお方がいるということです。私たちが、いい気になって気持ちよく人をさばっているその傍らにあって、それを逐一眺めていて、それに見合った相応しい審判を下しているお方がいる、イエスさまはそう言われるのです。人は、究極、神にさばかれる存在であることを忘れてはなりません。人を殺す者は、自分も殺されます。人の物を盗む者は、自分も盗まれます。人を裏切る者は、自分も裏切られます。そうして、自分がやったことを自分もされることで、人は自分が最終的な審判者ではないのだということを理屈抜きで思い知ります。自分が人をさばく傍らに、自分をさばくお方がいることを実感します。究極の審判者である神を知るのです。

イエスさまは続けます。「あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。」私たちが人を量るその「量り」で私たちも量られ、私たちが人をさばくその基準で私たち自身もさばかれる、とイエスさまは言われます。つまり、さばきをなす基準が問題なのです。どういう基準で人を量り、どういう基準で人をさばくのか、「量り」が問題です。何を基準とし、もっと言えば、誰を基準とするのか、それが問題です。神か、人か、神を基準とするのか、それとも人を基準とするのか、それが問題です。

自分を基準に、人が思いのままに人をさばくなら、自分もそのようにさばかれます。そして、そうされることで、人は、自分が神ではないことを思い知ります。自分の思いのままに人をさばっているこの自分が神ではなく、他に神がおられることを思い知ります。人をさばっている私が神なのではなく、私をさばくお方がこそが神であることを知るようになります。この私を量り、審判なさる方こそ、神なのです。生ける、まことの、唯一の神です。

神が世界の中心です。神が世界の支配者です。審判者です。さばき主です。世界はこの方によって造られました。この方が世界を造り、世界を支配し、審判します。そして、救うのです。究極の審判者は神です。

「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。」イエスさまのおことばの通り、私たちは、自分が世界の中心ではないことを知らなければなりません。人をさばっているこの私が神なのではなく、私をさばくお方がいるのです。そして、私をさばくお方がこそが神です。神は、いい気になって思いのままに人をさばっている私たちをさばかれます。そうして、私たちが神ではないこと、私たちが最終的な審判者ではなく、神こそが最後の審判者であることを、私たちに思い知らせてくださるのです。

ここに集う私たちひとりひとりが、私たちの罪をさばかれる神を知り、神に立ち帰って、永遠の審判者なる神の前に、罪を悔い改めつつ、正しく正直に生きていくよう祈ります。